

【源泉交渉】

議論のフライングについて

議論はテーマに従って順番に進めるべきです。自分の都合に合わせて勝手に順番を入れ替えたり、飛ばしたりすると議論そのものが成り立たないことがあります。この度の「中央図書館」建設構想では「東図書館」を廃止するかどうかが大変重要な焦点となっています。にも拘わらず、当局と一部の市議は、東図書館は別館とする「別館ありき」から議論を進めようとしております。しかしこの「別館ありき」の論理は明らかに“議論のフライング”に当たります。なぜなら「東図書館」の存続について議論すべき第一段階目を飛び越えていきなり「別館ありき」から議論を始めようとしているからです。そこでは「東図書館」はすでに廃止されるものとして「別館」が議論の中心になってしまっているからです。「別館」については、あくまでも「東図書館」の廃止が決まればとのことであり、「廃止」が決まって初めて議論のテーブルに乗せられる議題のはず、それは第二段階での議論のはずです。それをいきなり第一段階の議論を飛ばして突如第二段階の「別館ありき」に議論を飛躍させるのは決してフェアな対応とは言えません、スポーツの世界で言うフライングです。陸上競技も種目にもよりますが、フライング一回目で失格となる種目も、再スタートとなる種目もあるようです。勿論、勝手にスタートラインやゴールラインを動かすことは言うまでもなく厳禁のはずですが、そんなことが行われれば即刻出場停止になるのは当たり前でしょう。しかし、我が市の図書館問題では、市当局や心無い市議が行政の“公”をバックにして、いわば、力の不均衡な社会空間を利用して、市の政策案を鵜呑みに市民に理解するよう迫る場面が見られます。それは、市当局はいち早く自らの政策である「別館ありき」を市議会で承認させようとあせついているためであり、トンチンカンな市議を手なずけて、議会に影響力を強めて早々と自らの持論（妄想）を手早く議会通過を図るよう仕向ける策略であり、また当の市議は、市議団の中で有利に指導力を持つようとして当局にすり寄り付度して、当局の意向に従い当局の言いなりになって当局の関心を得、当局との親密度をたかめることで、市議団の中での存在感を強めたいとの思惑が働くのかも知れません。または、市当局のお覚えが目出度くなること、とにかく「目立つ」ことを意識する野心の思いがあるのかも知れません。しかしそれらの行動はいずれも“私利”を意識したものであり“公”に資するものではありません。“公”に資するためにはフライングを犯してまでの議論などせず、正々堂々とした正面から、地道に第一段階からの議論の積み上げを行うべきです。

当局も市議もフライングを犯してまで議論を進める当事者には何らかの制裁があっても良いようにも思えますが、そこはスポーツと違い、意見の多様性をも重んじる市民は、今後の動静を注視することで、公正な議論の進展を望みたいものです。特に昨今は当局の強引な議論の進展志向が見られ、当局の強権的体質が見え隠れしていますが、これは民主主義に反するもので決して望ましいものでも目指すべき方向のものでもありません。当局は自らの持論を押し付けるのっではなく、市民の意向を丁寧によく上げ、政策に反映してもらいたいものです。